

4 豊科

豊科は安曇野市の東部に位置し、東の筑摩山地と梓川および黒沢川の扇状地によって形成されている。

山地は犀川東部に限られ、犀川西部にはゆるやかな平坦地に水田が広がっている。豊科には都市計画法による規制が敷かれてきた経緯もあり、田園風景の中に比較的規模の大きな屋敷林が点在し、北アルプスの眺望と調和した美しい景観を形成している。



4-1 しげやなぎ 重柳 ケヤキに囲まれた屋敷林

安曇野市豊科南穂高



丸山宅を東から望む



丸山宅に接して祀られる伊勢宮



ケヤキの大樹

重柳は読んで字のごとく、かつてこの低湿地帯に群生していたヤナギのさま様に由来する。地勢は梓川扇状地の扇端に位置しており、西に万水川と東に犀川、そして集落の南東から北西に向かっては中曾根川が流れ、八幡宮を中心にした微高地に集落が形成されてきた。

初見は戦国時代の穂高神社文書に針俣はりまた（現在の踏入）とともに見える。中曾根川以北には安定した耕地は少なく、江戸中期に筑摩郡との郡境が決定され堤防が築かれたが、その堤防もしばしば決壊し、洪水被害の発生は少なくなかった。その洪水除けに祀ったのが伊勢宮であろうといわれており、集落南東部の最も犀川の影響を受けやすい場所に位置し、周りに配置された数本のケヤキと併せて、水害への守りを固めている。

重柳の屋敷林

東面のケヤキの大樹は伊勢宮の森と一体化して見事であり、北面に配されているスギの樹木とともに、近年開通した県道（オリンピック道路）から北アルプスを望む一番の風景をつくっている。しかし、周辺の



轟宅正面



轟宅の生け垣



轟宅の石積み



大きな馬頭観音の供養塔

水路の改修でコンクリートの3面張りとなつてからは、水分を多く必要とするケヤキの大木が枯れてきたとのこと。

丸山宅の屋敷林

丸山宅は重柳地区の集落の南に位置し、屋敷に接して伊勢宮が祀られている。敷地は合計で3,000平方尺（約900坪）余を有し、田園の中に単独で建っている。玄関を西面に配しており、屋敷林と土塁が東面に見られる。これは犀川・中曾根川の洪水に対処したものとみられる。

轟宅の屋敷林

轟宅は八幡宮の東にあり、南東面にある石積みとその上の生け垣が見事な景観を醸している。さらに、

その内側に沿う形で置かれた、スギを主とする針葉樹の高木は見事。母屋はこの地特有の本棟造であり、冠木門を入り式台を右手に見ての戸は、手入れをしている家人の気持ちが伝わってくるよう。隣接する八幡宮の社叢と一体化し、その景観は地元にとってかけがえのない風景となっている。



4-2 ^{てらどころ} 寺所 生け垣の古道にある屋敷林

安曇野市豊科南穂高



岡村宅を東から望む



岡村宅正面の門



岡村宅の山桑の古木

寺所の地名の起源は「寺のあったところ」という意味で、そこに集落が営まれ、やがて郷村の名となった。文献上の初見は戦国時代の穂高神社文書である。

犀川の左岸河岸段丘上に位置し、犀川の旧河床を流れる中曽根川の自然堤防上に沿って集落が並んでいる。中心地域は当時も現在と変わらず観音堂付近（西ノ側）で、平安前期の土師器と須恵器が出土している。江戸前期の記録に、観音堂の北に松本城下の恵光院領が見える。熊倉からの古道・千国道が西ノ側を南北に通じ、踏入に通じていて、現在も古い面影を残している。

寺所東南部には中曽根川からの取水門跡があり、当初の矢原堰の取水口であったと考えられる。またこの下流域にある徳治郎地籍との間には払い水門跡があり、当地の水防の史跡は少なくない。

矢原堰の開削は、松本藩の保高組代官によって計画されたが、通水に失敗し、最後は矢原村の庄屋・白井弥三郎によって、犀川から取水して承応3年（1654）に完成した。これと同様の経緯をたどり、



岡村宅のスギ林



集落南側にある岡村宅を東から望む



別の岡村宅の南面に連なるスギの防風林



最初は梓川最下流から取水し（寛文2年〈1662〉）、後に奈良井川に取入口を変えた（貞享2年〈1685〉）勘左衛門堰と併せて、往時の工事の苦勞が忍ばれる。

岡村宅の屋敷林

岡村家は江戸時代に松本藩へ山繭を献上していたという。正面の門は明治初年に松本城から譲り受けたという「二の丸書院表門」。門前にはスギ林が広がっている。門をくぐるとすぐある山桑の古木は、江戸中頃から末期にかけて植えられたらしい。クワは本来落葉高木なので、このように高くなる。「寺所の山桑の古木」の名称で安曇野市天然記念物に指定されている。

これとは別に、集落南側にある岡村宅にはスギの防風林が連なっており、地元ではこのような防風林のことを「くね林」とも言っている。



高橋宅を北側から望む



高橋宅の土塁を南側から見る

徳治郎とは、中世のこの地の開発名主（地主）の名前に由来すると考えられる。文禄年間（1592～96）集落の西側に犀川が流れていたとの記録（「田沢村神社之縁起」）があるが（現在の中曾根川）、氾

濫で流路が東へ移動し、徳治郎は親村の田沢本郷とは川を隔てた集落となった。

近世にあっても犀川の氾濫が頻繁に発生して水に浸かり、湿地を示す「花見」の字が各所に残っている所である。家々では家屋の南や東側に土塁を築いて洪水に備え、現在でも一部に残っている。犀川の度重なる洪水により田畑の開発は遅れ、江戸中期の検地によれば、耕地は現在の約2割にすぎないことが分かる。水防と五穀豊穡を祈念して、江戸初期には伊勢宮が創建されている。

高橋宅の屋敷林

屋敷は東より西側に分家2軒を配し、一族で災害に抗したと思われる。南東の土塁には自然のマツが生えており、樹齢は約300年を超えるだろうとのこ



高橋宅の土塁を東側から見る



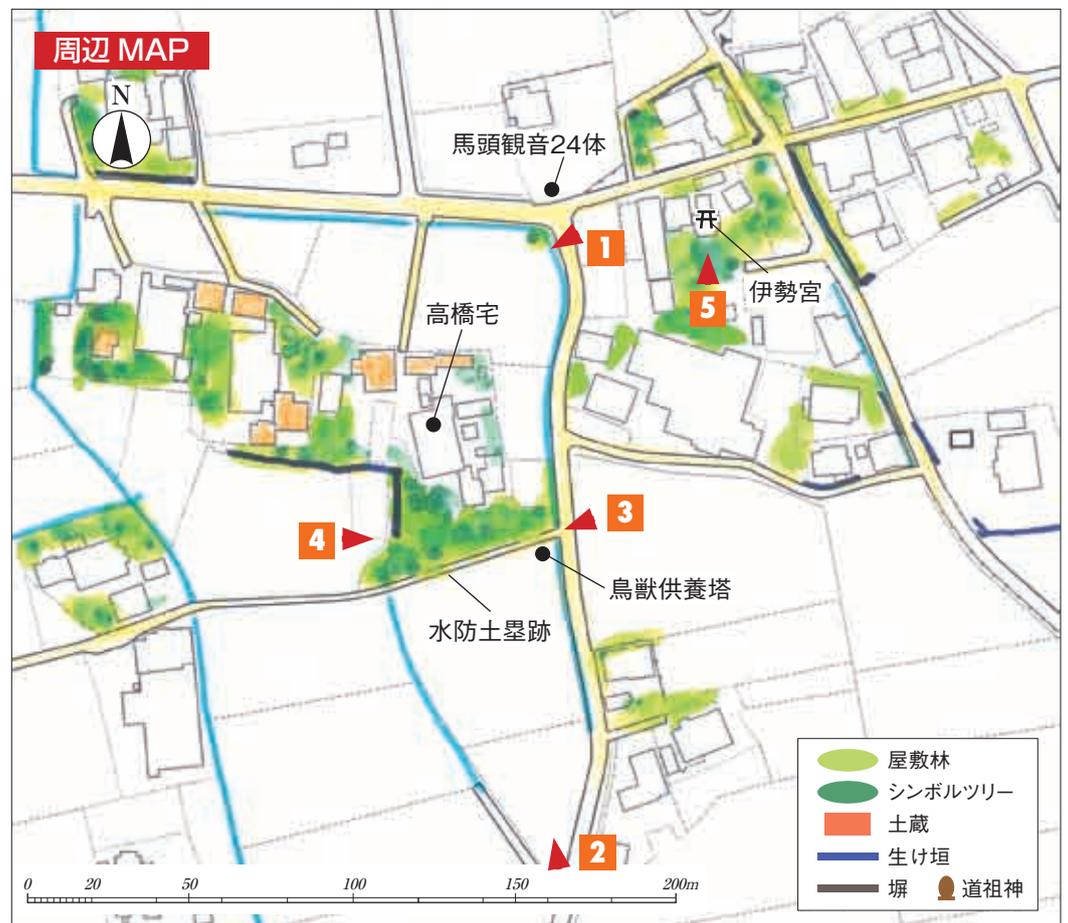
屋敷内を通る水路



水防のために祀られた伊勢宮

と。現存している土塁は明治初期に先代が人力で構築したといわれ、貴重な遺産である。昭和40年代の圃場整備事業の時にもこの土手は残され、今に至っている。南面土塁に自然のまま現存する樹木は更新期にあるが、当主が植栽計画を立てており、今後の保全にも期待がかかる。

雁行状に配された一族3軒の家並みを取り囲んでいる屋敷林は、南西面に多く配置されている。家屋のモノクロームの色調と、北東面に連続した白壁の色調とが見事にとけ合った素晴らしい景観である。



ほんむら 4-4 本村 東南風に備える屋敷林

安曇野市豊科



小林宅を正面から望む



小林宅の西北に咲くシダレザクラ（安曇野市天然記念物）



小林宅を西から望む

本村地区は、字大海渡に平安時代前期の土器が出土していて、土地が良く地割も整えられて早くより開発されていることが知られる。中世末には成相氏が居館していて、成相郷の本郷として更に開発を進め、慶安13年（1608）からは成相本村と呼称されるようになった。

江戸時代は松本藩領成相組に属し、梓川から引水した成相堰を利用していたが、慢性的な水不足が悩みであった。しかし、寛政9年（1797）に勘左衛門堰が改修されたことで水不足が解消し、穀物の生産は大きく増えることになった。

本村の東を通る千国街道沿いに、成相新田宿（成相町村・成相新田町村）が成立。この宿には伝馬を差配する問屋があり、塩・塩漬^{わらび}け蕨・竹荷が公用の主要な荷駄であった。

本村の屋敷林

千国街道から分かれて中萱を通り、飛驒に通じる飛驒道の西側に接しているが、堀金の中堀や住吉など近世の街村とは趣を異にする景観を呈している。やはり中世に成立した郷村の特徴を備え、各戸の家



丸山宅の屋敷林

4



安曇野市内最大の道祖神

5



丸山宅の長屋塀

6

屋はそれぞれの屋敷林を四周に巡らしている。

小林宅の屋敷林は、南・西・北に「岳おろし」に備えるための防風林が配されている。写真①の左手に斜めになっている大木はクリで、家人の庇護を受けて大事に養生されている。北西に咲くシダレザクラは、エドヒガンザクラともイトザクラとも呼ばれ、安曇野市の天然記念物に指定されている。

丸山宅の屋敷林は東側にこれだけ多数の高木があるのは珍しい。

本村の道祖神

成相氏の居館跡に隣接する公民館敷地に、3基の道祖神碑と1基の青面金剛像（庚申塔）が基壇の上に祀られている。

文字碑は高さ205㎝、幅180㎝という巨碑で、「柳盤」による雄渾な文字が刻まれている。背面には「弘化丁未秋改建 成相本村」の銘があり、干支から弘化4年（1847）の造立であることが分かる。



4-5 よしの 吉野 古道にたたずむ屋敷林

安曇野市豊科



熊井宅を南東方向から望む



熊井宅の南面にあるチヂミガシワ

吉野という地名は、安土桃山時代の織田信長による禁制に「吉野郷」とあるのが初見であるが、その前身である「唐笠木^{からかさぎ}」の初見は室町時代初期にまでさかのぼる。吉野とは佳字地名としてつけられたものであろう。

吉野は梓川扇状地の扇端に位置し、小字「唐笠木^{かじかいと}」「梶海渡」は湧水と自然流による古代の開発の歴史を示している。中村・中原・荒井の各木戸は自然流（中沢）により、吉野町並みは中世末期成相堰

から分流した鳥羽堰の末流により、それぞれ成立したと考えられる。

吉野には、松本城下へ至る千国街道の三つのルートのうち、成相追分から分岐した松本道と熊倉道という二つの主要な道が通っている。とりわけ後者は江戸時代に架橋されていたこともある熊倉の渡しを通っていたため、このルートを経て多くの村から年貢が松本城下へ運ばれた。しかし、もう一つの長尾前の渡しの近くに梓橋が架橋され、新糸魚川街道が開通した明治23年（1890）以降は、しだいに利用されなくなった。

「鍛冶屋の屋敷」が語源とみられる梶海渡（鍛冶垣内）、「長者池」にまつわる長者伝説、平安時代の住居址8軒が出土した吉野町館遺跡など歴史的興味に尽きない地域である。

吉野の屋敷林

熊井宅は南面にヒノキの防風林が配置され、「岳おろし」といわれる山からの風に対応している。このヒノキ並木と熊井宅敷地との間に市道が通っているのはとても珍しい現象である。母屋は近年建て替



3

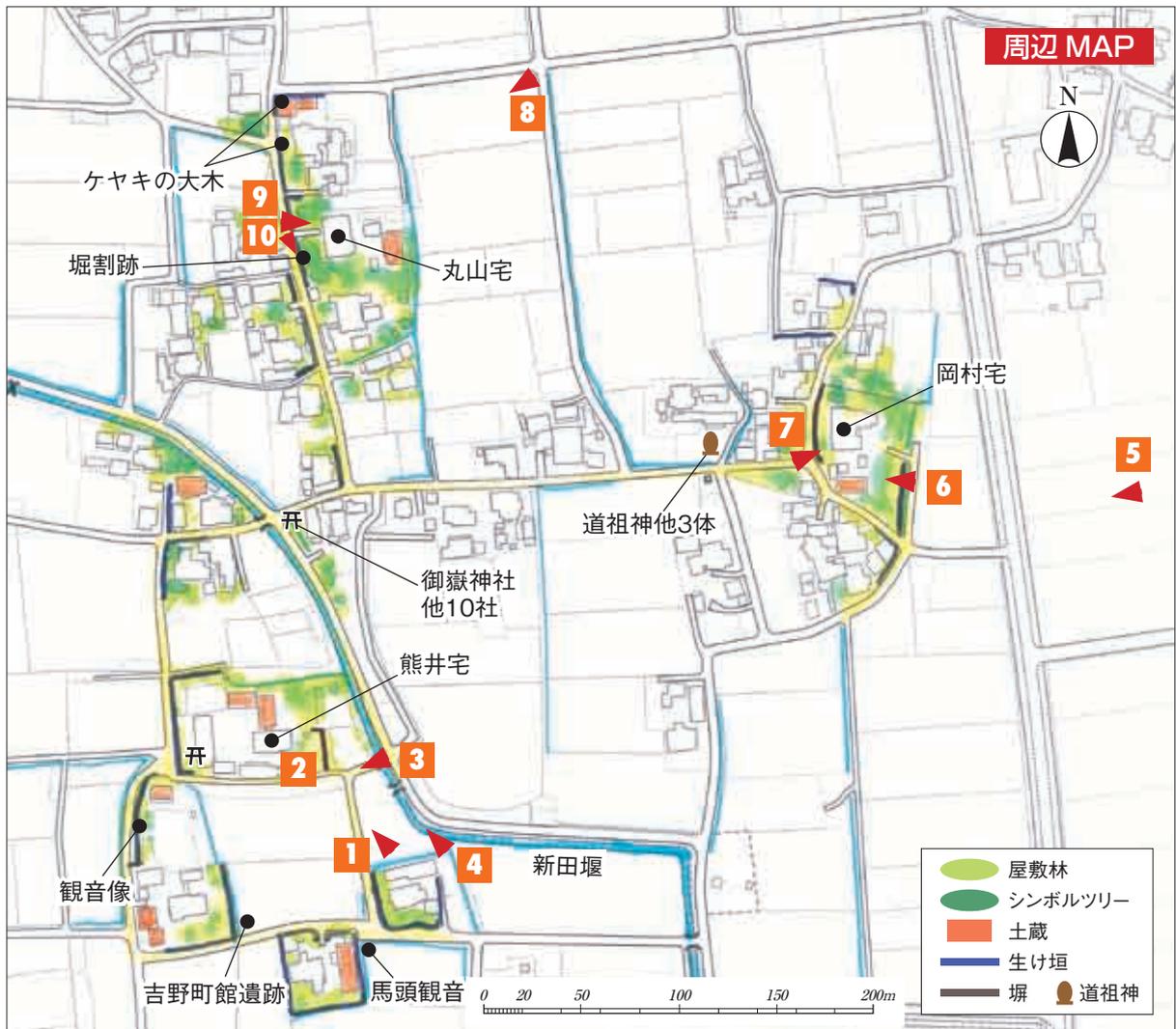
ヒノキ並木と熊井宅敷地との間を通る市道

えている。西側の土蔵跡から遺跡が発見された。また西面の樹木は近年道路の拡幅で伐採されている。屋敷の南面にチヂミガシワといわれる珍しい樹木がある。



4

近くを新田堰が流れる熊井宅





岡村宅の屋敷林の遠望

岡村宅は千国道に接し、敷地3,000平方メートル（約900坪）余の敷地には、本棟造の母屋、白壁の塀、屋敷林など安曇野の伝統的な風景が保持されている。近年は南側の土蔵が昔の面影を残したまま改造され、快適な空間を提供するアートカフェとして、多くの人々に利用されている。



土蔵を改造したアートカフェ



岡村宅の屋敷林



8

丸山宅の屋敷林を東から遠望



9

丸山宅の西側正門から母屋玄関を見る



10

丸山宅の屋敷をめぐらす堀割跡 「吉野の堀屋敷跡」として安曇野市史跡に指定

4-6 な か そ ね 中曾根 拾ヶ堰とともにある屋敷林

安曇野市豊科高家



東から望む山田宅遠景



山田宅の冠木門と塀



拾ヶ堰と山田宅

「そね」とは「湖中の浅瀬」、もしくは周囲より高い場所を意味し、水が引けば小高い台地になる部分を指す。そのような地形の中央部だということから「中曾根」という名がついたと考えられる。つまり、かつて梓川の氾濫原の中洲であったようで、その上流部（南端部）を上中曾根と呼ぶ。飯田地区など同じく南北に長い中曾根地区は、大きく分けて南から上中曾根・北村・夫領^{ぶりょう}・一丁田・元町・下中曾根などの集落から構成されている。

現在は西側に農免道路が通ったことで交通の要衝からはずれたが、古道の面影を留める各木戸では生け垣などがよく手入れされ、往時の趣きが味わえる。

中曾根の屋敷林

全体的には針葉樹が多いが、下中曾根にはケヤキの古木数本に囲まれた屋敷もある。上中曾根を除いては水路と道が南北に直線的に通っていることから、家屋の配置も南北に並ぶケースが多く、屋敷林の多くは東西側よりも南か北に多く配置されているように見受けられる。夫領から一丁田にかけては、茅葺屋根の古屋敷が4軒ほぼ並んで建っており、屋敷林、



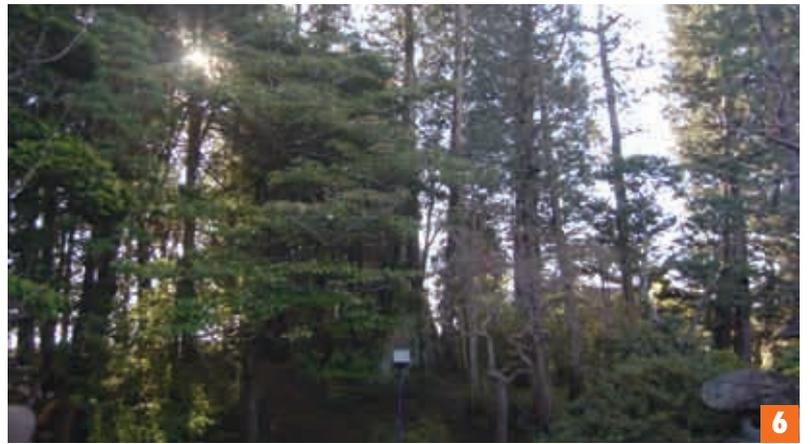
拾ヶ堰の右岸堤防上から見た山田宅の屋敷林 手前の生け垣の中に祀られた「水神様」は左岸の海野宅の敷地



右岸に祀られる「水神様」



中曽根に息づくお地藏さま 赤い毛糸の「べべ」に地域の温もりが感じられる



山田宅の南東面の屋敷林

庭園などと併せてとても懐かしい風景を保っている。

山田宅の屋敷林

山田宅の敷地南面は拾ヶ堰に面しており、拾ヶ堰の水位の方が山田宅の敷地より高い。そのことから、通水後には水防に関する苦労があったものと推測される。敷地と土手の間には「水神様」が祀られているが、その敷地は対岸の海野宅の敷地が堰敷で分断されたものである。

山田宅の屋敷林は針葉樹を中心に構成され、南東面の層の厚さは見事であり、岳おろしの強さが想像される。



7 は地図外

4-7 下鳥羽 しもとば 古井戸とともにある屋敷林

安曇野市豊科高家



細田宅の屋敷林遠景



細田宅母屋の本棟造

鳥羽という地名の由来は、とま 苦（ムシロ）の材料であるすげ かや 菅や萱が繁茂していた場所という説や、川の渡河点を意味するとま 渡間やとば 渡場が訛ったという説など諸説ある。文献上では諏訪下社文書に、文明8年（1476）には「とま 戸間」と見え、天正7年（1579）には「鳥羽」と見える。

鳥羽郷の成立は、自然流の旧中曽根川を水源とした鳥羽堰による中村・太子村・寺村の各集落の古代開発に始まり、その後住吉庄の大規模用水路として開削された成相堰（現真鳥羽堰）により中世に確定したものとみられる。江戸時代の寛文6年（1666）の検地のとき上・下鳥羽村に分かれた。

全体的には水の乏しい地域で、飲用水の確保にも苦勞した歴史が下鳥羽わでの井戸などに見られる。中世末の豪族・丸山将監の館跡とされる鳥羽館跡や、長い歴史をもつ古刹日光寺、入会地に立ち入る際などに安全祈願をし

た山ノ神など、歴史の見どころが多くある。

細田宅の屋敷林

下鳥羽の細田宅の母屋は本棟造と唐破風の組み合わせがユニークな、築およそ200年の建物。西面と南面を中心にスギやケヤキなどの古木・高木が取り巻く様は現在でも圧巻だが、道路拡幅工事前はケヤ



細田宅の南・西面はスギやケヤキの高木が取り巻く



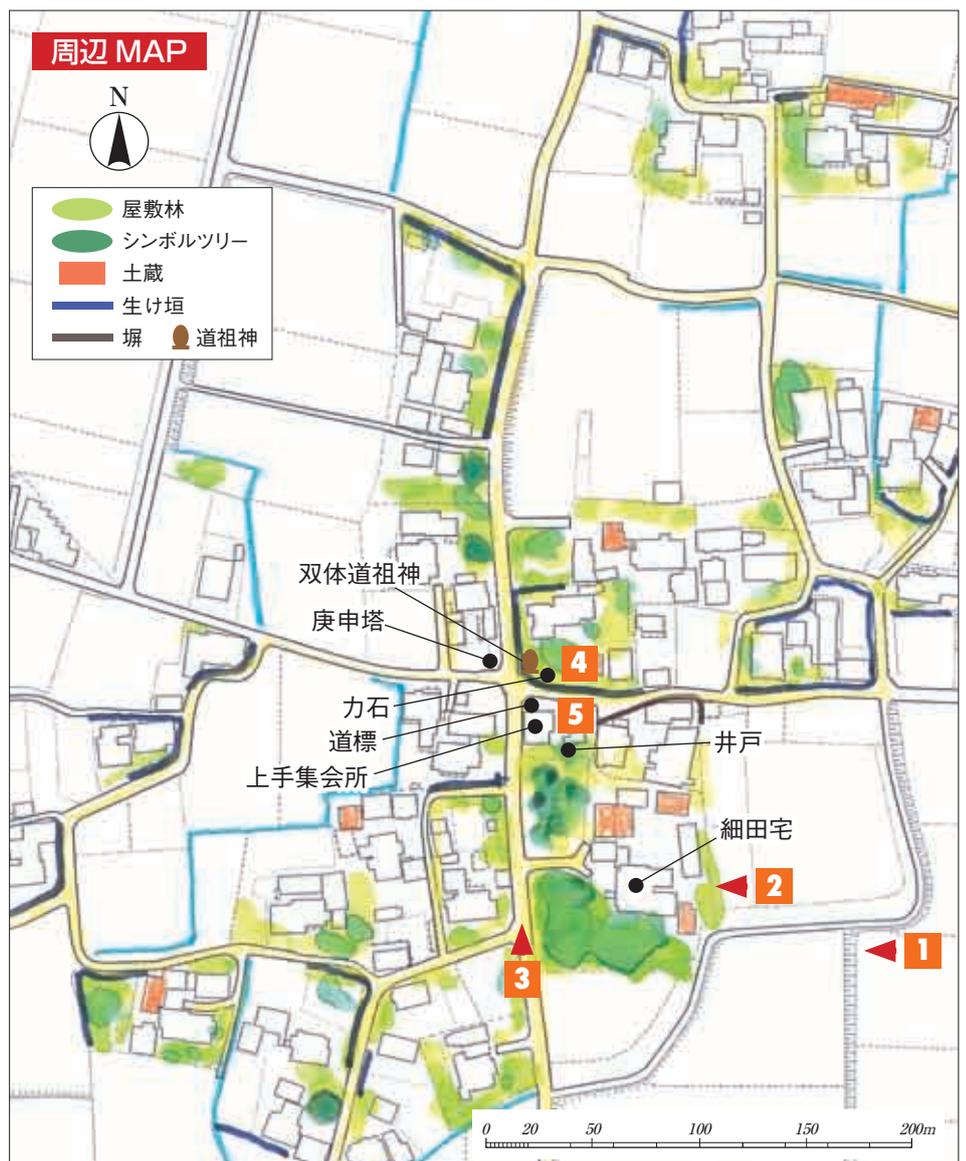
下鳥羽村の郷蔵跡と力石



下鳥羽上手の井戸

キがさらに5、6本はあったとのこと。江戸期には松本城からの来賓を迎える門もあったという。職人技の冴える東・南面の堀の石積みにも、歴史の移ろいを感じる。

細田宅の北側の上手集会所には郷蔵跡や生活用水として用いられた深井戸があり、近年まで使用されていた。また若者が祭りの際に力比べをした力石や、馬を繋いだ馬つなぎ石もある。現在も集落による祭りが続けられ、また昔をしのぶ共同作業の一つとして、井戸の汲み替えなどを行っており、これらを通して歴史を後世に伝える催しをしている地域である。



なかいいだ 4-8 中飯田① せせらぎに連なる屋敷林

安曇野市豊科高家



1

街道に連なる屋敷林を東から望む



2

南北に流れる飯田堰

中飯田を含む飯田地区は梓川の氾濫原にあり、土壌は肥沃な反面、洪水による災禍とは常に背中合わせであった。この氾濫原の自然堤防（微高地）の上に、飯田堰に沿うかたちで形成された村落が旧飯田村（現在の飯田区・下飯田区）で、中飯田とはその中央部を指す。飯田堰とは古代から存在する自然流を取り込んだ用水路で、近世には勘左衛門堰が開削されたことにより、飯田堰に生じた余り水を利用して、さらに開墾が進んだ。

下飯田地区を通る千国街道には、かつて梓川を舟渡しする飯田前の渡しがあり、北の熊倉の渡し、南の長尾前の渡しに次ぐ交通の要衝でもあった。

飯田堰沿いの街道には、旧庄屋の屋敷などが点在し、戦国時代の遺構の飯田砦跡なども残っていて、豊かな屋敷林とともに往時の生活風景を想起させる。

明治23年（1890）の梓橋架橋により交通量が急減したことにより、古道や堰、本棟造の家屋や土蔵、そして屋敷林などが一体となって保全されており、安曇野の文化財としてこれからも残していきたい景観である。



飯田宅を含む集落全体を西から遠望する

飯田宅の屋敷林

集落南部にある飯田宅には、岳おろし（北アルプスからの風）を防ぐための防風林が南・西面に整えられている。主にスギ・ヒノキで構成され、角にはケヤキなども配されている。母屋の上座敷前に造られた庭園も見事である。西面は飯田堰沿いの街道に面している。これまで道路拡幅にかならなかったため、高木による屋敷林や古い石積みが保全されている。

また、集落北部にある別の飯田宅の母屋は築200余年を超える本棟造で、その庭園や源氏壁とあわせて安曇野一帯によく見られる本棟造の民家の特徴をととても良い状態で残している。江戸時代には庄屋を勤めており、屋号は「おかしら」といった。





集落の北部にある飯田宅の正面

4



5

源氏塀がめぐる飯田宅



6

街道に面して石積みが残されている



飯田砦跡（左）を東から望む



戦国期の名残をとどめる飯田砦跡



馬頭観音を集めた「つくれっ原観音堂」 かつて交通の要衝にあったことの名残ともみられる

なかいいた 4-9 中飯田② 酒蔵を守る屋敷林

安曇野市豊科高家



東から見た飯野屋



屋敷正面（南面）の防風林は主にスギとヒノキ

現在、かりんとうの「蔵久」として人気の観光スポットとなっている飯野屋（屋号）は（84頁参照）、かつては造り酒屋であった。1,500坪（約5,000平方メートル）とされる敷地では、主に南・西・北面にスギなどの樹木を配している。文化7年（1810）建築という母屋ほか屋敷内の建物は、古い造り酒屋の歴代当主の努力により守られてきたもので、酒蔵の趣がこれほど残っていることは貴重である。

「安曇野は米どころ」という現在のイメージに反して、安曇野市内には酒蔵は意外と少ないが、この白壁と瓦屋根のコントラストは周囲の屋敷林と溶け合い、明媚を極める。5棟の建物が国の登録有形文化財に登録されている。

飯野屋の屋敷林

屋敷正面（南面）に連なる防風林は主にスギとヒノキで、外周を巡る堀も水路として健在である。酒蔵は一見今でも現役さながらの風情を表わす。煙突は釜場をさし、酒母部屋・麴室こうじむろと並ぶ酒蔵のシンボル。冬場の仕込み期は酒米を蒸すために、釜には毎日夜明け前から火が入れられた。



外周を巡る堀も水路として健在

3



築 200 年を超えた本棟造の母屋

4



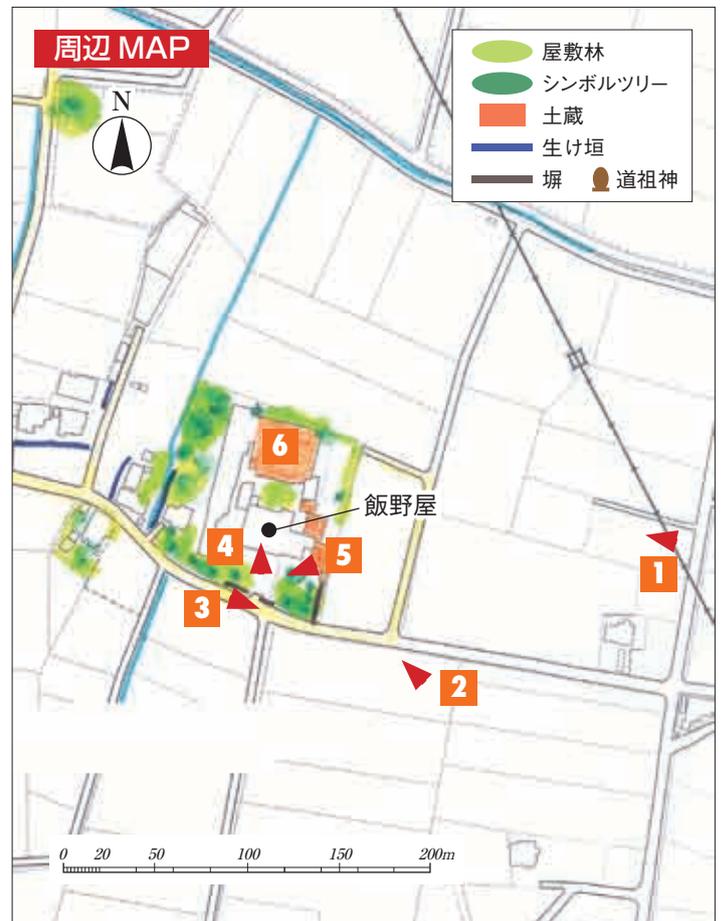
中庭は店舗内から鑑賞できる

5



釜場の煙突

6



4-10 ままべ 真々部 信玄ゆかりの棒道にある屋敷林

安曇野市豊科高家



竹内宅の屋敷林



町通りの道辻の道祖神



竹内宅南の小道



「町通り」(別名：武田の棒道)はかつて信玄の命で整備された、軍事・経済道路

真々部の地名は、梓川の河岸段丘端で、崖欠け地形からきた地名という説など、諸説がある。梓川はしばしばこの付近で決壊し、真々部、上・下鳥羽の巾下(河岸段丘下)の村々を押し流した。

真々部を開発した幹線水路は、成相堰(現真鳥羽堰)、呑堰、梓川支流の旧中曽根川の3本で、巾下地籍の開発は平安時代にさかのぼるとみられる。

真々部を構成する主な集落は、南から上真々部・梓橋・中村・殿村・町通り・田中などで、真々部氏館のあった殿村には金竜寺など寺が多く存在し「七寺八小路」とも呼ばれた。ここは甲斐の武田氏が軍事拠点として整備した宿城の性格を持っている。

殿村の西を南北に貫く「町通り」は「武田の棒道」とも呼ばれた、戦国時代の軍事経済道路であった。以来この街道は梓橋が架橋される明治23年(1890)まで街道として機能し、大いに賑わいを見せた。

竹内宅の屋敷林(町通り)

竹内宅は海鼠壁や源氏塀と屋敷林のコントラストがよい。町通りに面して東向きに門を構える敷地は、南・西・北に針葉樹の高木を配し、よく手入れされ



田中の本山宅を東から遠望する



本山宅の源氏塀



梓川の支流の旧中曽根川による河岸段丘

ている。

本山宅の屋敷林 (田中)

田中は真々部の北東部に位置する集落で棒道とは接していない。本山宅は南・西・北面に防風林を配している。東面には広葉樹を、北西面はスギ・ヒノキなどの樹木を配しており、岳おろしを防ぐためのものであることが分かる。玄関は東を向いており、この面の樹木については低層の庭園の造りとなっている。本棟造の母屋とひととき存在感のある長屋門とが一体となって、迫力のある景観をつくっている。



7 は地図外



▲ 真々部田中地区

◀ 真々部町通り地区

古民家再生の実例——「蔵久」^{くらきゅう}

本誌80頁で紹介した飯野屋では、母屋と酒蔵の一部を利用して、久星食品の経営するカフェレストランと、かりんとうなどの製造販売所「花林桃源郷 蔵久」が、順調に営業を続けている。

本棟造を筆頭に安曇野市内に相当数残っている伝統的家屋や建築物は、少子高齢化と景気低迷の流れの中で存亡の危機に面しつつある。それはすなわち安曇野の風景が一変することと同義といっても過言ではない。

「蔵久」の例は、所有者、事業者、地域の気持ちや努力が一致した事例として、今後の景観保全の取り組みへの参考となるのではないだろうか。



広い庭園部を利用した屋外カフェ



かつて味噌仕込み用の蔵だった建物を改造し、現在はカフェとして利用している



ホーロータンクが並ぶ仕込み蔵は今でも現役さながら（通常は非公開）



母屋の座敷はそばを中心とした食事処